

Title	セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究(Abstract_要旨)
Author(s)	落合, いずみ
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19431
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

京都大学	博士（文学）	氏名	落合いずみ
論文題目	セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文はオーストロネシア語族、アタヤル語群に属するセデック語を研究対象とする。セデック語は台湾オーストロネシア諸語と総括される台湾先住民の言語のひとつで、台湾中央東部の南投県および花蓮県に3万人ほどの話者がいる。パラン方言とタロコ方言の2つの方言があるが、典型的な危機言語である。とりわけ本論文で扱うパラン方言は、1930年に起こった霧社事件の犠牲となり話者が激減した。論文は2部構成で、第I部では、論者のフィールド言語調査に基づきセデック語パラン方言の文法を記述する。第II部は、各種文法項目の中で特にこれまで先行研究で見過ごされてきた、非意志性接頭辞に焦点を当てている。そのことによって、セデック語の文法記述を補完・充実させるのが狙いである。</p> <p>第I部は全6章から構成される。第1章はセデック語パラン方言の先行研究を紹介する。簡単な語彙が紹介された1874年に始まり、日本統治時代には日本人による研究があったが、その後いったん研究は途絶えた。1990年代に入り、危機言語研究の潮流にのって研究が増えたが、概して理論言語学の立場からの研究が多かった。信頼できる記述研究は多くなく、パラン方言では日本統治時代の調査に基づくE. Asai（1953）の形態論分析と楊秀芳（1976）の音韻論が特筆される。話者数がはるかに多いタロコ方言ではF. Pecoraro（1977, 1979）の文法記述と辞書、月田尚美（2009）による記述文法がある。</p> <p>第2章から第6章までは文法記述である。第2章は音声・音韻論を扱う。最小対にもとづき母音音素と子音音素を抽出したあとで、音節構造やアクセントを記述する。音素配列上の特徴と特殊な位置での発音の変容が記述される。特に語末から3音節以前ではすべての母音が中和してuと発音されるという特徴がある。分節音素は次の通り：a, e, i, o, u; uy; y, w; p, b, t, d, c, k, g, q, ʔ, s, x, h, r, l, m, n, ŋ。さらに日本語からの借用で新たに取り入れた「ざ」行音と拗音がどのように音韻体系に組み込まれているかを見る。</p> <p>第3章は、セデック語パラン方言の品詞分類など語類についての記述である。名詞語根を定義した上で、名詞に含まれる語を意味範疇ごとにまとめ、さらに数詞、数量詞、代名詞、指示詞、固有名詞、疑問詞、不定代名詞を紹介する。名詞が組み合わさった複合名詞もここで扱われる。語の成り立ちが特殊なものとして重複語について述べるが、重複は生産的ではない。次に、副詞、接語、間投詞、主題標識、格標識、終助詞、接続詞、否定辞、疑問標識、迂言的時制</p>			

・アスペクト標識、理由・条件標識を紹介する。

第4章は、セデック語パラン方言の動詞を派生する接辞と他動詞に関わる態の記述である。これらの接辞には他動性の低い動詞を派生するものから、他動性の高い動詞を派生するものがある。これらの接辞が付く語根の種類や、否定辞後の形式についても述べる。さらに第II部で問題にする非意志性接頭辞 *tu-*をはじめとする自動詞を形成する種々の接頭辞と、それらの形式が否定辞の後に使われた場合の特別な形式について記述する。次に他動詞を派生する接辞を提示する。オーストロネシア語族に属する言語の特性として、他動詞の語幹は動作主態、非動作主態、状況態の3種に大別できる。動作主態は現在・過去・未来の3時制に対応する形式 (<um>/<umun>/mu- ; <角括弧>は接中辞) がある。非動作主態は現在・過去の2時制を表す接辞を持つ。そのうち対象態と場所態の態を表す接辞は、機能的な違いを見せない。状況態の現在形の接辞には、*su-* と *-a nun* の2種類がある。他動詞は、使役接頭辞 *pu-* をつけることによって、行為を促す人を項として導入する。

第5章は、名詞文、存在文などの特殊な構文を紹介した後で、基本構文の基本語順VS (動詞—自動詞主語)、VOA (動詞—目的語—動作主) を示し、接辞によって派生されたそれぞれの動詞が見せる統語構造を記述する。非意志動詞・能動態は主語1項を取る。静態動詞能動態も同じく主語1項を取る。動作主態動詞は動作主 (主語) と対象物 (非主語) の2項を取る構造が典型であり、非動作主態では対象物が主語、動作主が非主語になる。状況態では、動作主と対象物のほかに、もうひとつ状況、道具、受益対象などを導入し、それが主語となる。ここでは動名詞、動詞連続の副詞的修飾用法についても記述する。

第6章は、セデック語パラン方言の複雑な形態音韻論について詳述する。語根に接辞が付いた際に起きる音変化について、接頭辞、接中辞、接尾辞の順に記述する。まず静態接頭辞 *mu-*、高他動性・未来時制の *mu-/mupu-* およびそのほかの接頭辞、*su-*、*pu-*、*tu-* などが付いた際の音韻変化を詳述する。次に接中辞 <um> が引き起こす様々な音韻変化について説明する。接尾辞についての興味深い現象も紹介される。パラン方言では語根末の分節音の多くが通時的な変化を遂げた。しかし、接尾辞が付加すると古い形式が現れる (以下では > (不等号) の左が古い形式) : 1. *p* > *k*, 2. *b* > *k*, 3. *m* > *ŋ*, 4. *t* > *c*, 5. *d* > *c*, 6. *l* > *n*, 7. *r* > *n*, 8. *ag/ug/ig* > *o/u/uy*。また、母音から始まる語根に接尾辞が付くと、初頭母音が脱落し語形が大きく変化するので注意を要する。

第II部は、5つの章 (7章から11章) から成る。パラン方言とタロコ方言に見つかる子音 *t-* で始まる接頭辞についての研究であり、扱う接辞は8種類である。それらの接頭辞を含む語を2方言において網羅的に収集し、それらがすべてセ

デック祖語の非意志性を表す接頭辞*ta- にさかのぼることを論証する。

第7章は、非意志性接頭辞についての先行研究を提示する。パラン方言に関する主要な研究文献はAsai (1953) であるが、ta- (Asaiの表記) という接頭辞は受身を表すとの紹介にとどまり、語例も数語のみである。タロコ方言においては、Pecoraro (1977, 1979)が同源の接頭辞について、意味が多岐にわたり過ぎており、本来の用法を把握しづらいと述べている。しかし、タロコ方言の辞書には、彼が例示するもの以外にもt 系列の接頭辞を含む語が多く見つかる。パラン方言では語例が少ないのが難点であり、タロコ方言では基本の用法が掴めないのが難点であった。

第8章は、論者独自の調査により収集した浩瀚なパラン方言の語彙の中から探し出した、当該の接頭辞を含む120余りの非意志動詞をデータとして、パラン方言の非意志性接頭辞を以下の8種類に分類し、それぞれの派生関係の説明と意味分類を行う：1. tu-、2. mu-tu、3. tu-ku-、4. tu-Cu- (Cは語根初頭の母音と同一の子音であることを示す。つまりtuの後で語根の語頭の子音が畳音を起こしている。以下同様)、5. tu-gu-、6. t<un>-、7. tu-n-、8. t<um>u-。

第9章は、Pecoraro (1977, 1979) のセデック語タロコ方言辞書と文法記述から網羅的に抜き出した120余りの語を対象に、タロコ方言の非意志性接頭辞を8種類 (1. tə-, 2. mə-tə-, 3. tə-kə-, 4. tə-Cə-, 5. tə-gə-, 6. t<ən>ə-, 7. tə-nə-, 8. t<əm>ə-) に分類し、本辞書の記載に基づきそれぞれの派生関係の説明と意味分類を行う。なお、タロコ方言では、パラン方言とは異なり語尾から第3音節以前の音節では母音が中和してəとなる。

第10章は、パラン方言とタロコ方言の非意志動詞を比較言語学的に分析し、セデック祖語の非意志動詞を再建する試みである。8種類の非意志性接頭辞は、1. *ta-, 2. *ma-ta, 3. *ta-ka-, 4. *ta-CV-, 5. *ta-ga-, 6. *t<ən>a-, 7. *ta-nu-, 8. t<əm>a- と再建される。パラン方言・タロコ方言において非意志動詞の形式が一致する部分を抜き出し、両方言にみつかると同源の非意志動詞の派生関係や意味を検討し、セデック祖語における当該接頭辞を含む形式の派生関係と意味・機能の分類を行う。

第11章は、第II部の結論である。先行研究で必ずしも十分ではなかった非意志性接頭辞の記述を補充した。ところで、従来全く認識されていなかったが、本論文でセデック祖語に再建した非意志性接頭辞 *ta- は、オーストロネシア祖形に再建されている、偶発的、突発的事態を表す *ta-の反映形であることは明らかである。他のオーストロネシア諸語にみられる、この接辞は化石化された形式で残っているか、文法において周辺的な役割しか果たさないとされている。また従来は、台湾で話されている言語にこの接辞は存在しないと考えられてきた。ところが論者の研究によって、オーストロネシア語族の原郷である台

湾で話されている一言語にもこの接辞を含む形式が多く残されていること、しかもそれが動詞の派生において重要な役割を果たしていることが明らかにされた。過去200年に及ぶオーストロネシア語族言語に関する研究の中でも特筆すべき発見に数えられるであろう。

論文は以上の本論に続けて付録A、Bとして、パラン語方言とタロコ方言の非意志性接頭辞の目録、付録Cとして非意志性接頭辞のつく語根のセデック祖語の形式の再建、さらに付録Dとして談話資料、最後に本論文に現れるセデック語パラン方言の語彙が付録Eとして添えられている。これらもパラン語研究に対する大きな貢献である。

(論文審査の結果の要旨)

世界の言語の中で印欧語族に属する諸言語と並んで、最も広い範囲に分布するのはオーストロネシア語族に属する言語群である。台湾からフィリピン、インドネシアをはじめとする東南アジアの島国や太平洋地域からマダガスカルに至る広大な地域で話されている。一般にその原郷は台湾であるとされ、台湾の先住民族が話す言語 (Formosan) はこの語族に属する。台湾先住民の言語は原郷における多様性を反映して10の語群に分類されるが、インドネシア語やタガログ語などの多くの話者がいるマライポリネシア語派の言語とは異なり、どの言語も危機に瀕しており、次世代への継承が危ぶまれる。母語話者が生きている間に記録に残す必要性のきわめて高い言語である。

本論文は、その台湾で話されている先住民族の言語の内、アタヤル語群に属するセデック語についての研究である。この言語には台湾中央東部の南投県および花蓮県に3万人ほどの話者がいる。付録を除く本論は2部構成になっている。セデック語にはパラン方言とタロコ方言の2つの方言があるが、1930年に起こった霧社事件の犠牲となり、話者が極端に減ったパラン方言の包括的文法を記述する前半を第Ⅰ部とし、二つの方言に見られる非意志性を表す接頭辞 *tu-* に関する研究を第Ⅱ部としている。第Ⅱ部は第Ⅰ部を完成するべく調査を行う過程で発見した、オーストロネシア祖語との関係を考える上で重要な事実について述べる。論者は2007年からこの言語の調査を始め、実に10年弱の調査の成果として本論文をまとめている。以下に論文の内容について解説する。

第Ⅰ部は6章から成り立っている。言語の紹介と研究史の概観が第1章である。言語が知られたのは19世紀の終わり頃であり、日本統治時代に鳥居龍蔵をはじめとする日本人の研究者による調査が行われたが、終戦を境に途絶える。再び研究されるようになったのは1990年代以降である。パラン方言は話者が少なくタロコ方言に比べて研究が立ち後れている。語彙や形態論、音韻に関する研究は存在するがどれも断片的で、包括的な文法記述は存在していない。第2章以降は、音声・音韻 (第2章)、品詞分類 (第3章)、動詞形態論 (第4章)、統語論 (第5章)、形態音韻論 (第6章) を扱う章が続く。どの章でも記述は詳細で例文も多く、巻末には付録として語彙表も添えられており、包括的かつきわめて充実した記述文法となっていることは高く評価される。とりわけ形態音韻論の章では、接頭辞、接中辞、接尾辞の付加によって起きる複雑な音韻変化を克明に記述していて圧巻である。パラン方言を完全に継承している70代の二人の母語話者を主な調査協力者として作成されたこの文法記述は、今後この言語の参照文法として広く利用されるに違いない。

第Ⅰ部第4章でも扱われた非意志性の接頭辞 *tu-* をもっぱら扱うのが第Ⅱ部である。第8章に示された論者の調査により、実に120以上に及ぶパラン方言の語

にこの接頭辞が認められることが明らかになった。第7章の先行研究の紹介でも述べられているとおり、従来はほんの数語にこの接頭辞が認められると報告されていたので、これは驚くべき発見である。その発見をもとに第9章で論者は、Pecoraro (1977, 1979)により出版されていたタロコ方言の記述文法と辞書に依拠しながら、タロコ方言に見られる対応する形式を丹念に拾い出しほぼ網羅的に収集することに成功した。第10章では二つの方言に現れた形式を比較することにより、方言分岐以前の形式と意味や機能を推定している。第Ⅱ部の結論にあたる第11章では、再構成された形式と機能に照らして、これがオーストロネシア祖形に再建されている偶発的、突発的事態を表す接頭辞*ta-の反映形であることを明らかにした。他のオーストロネシア諸語にみられるこの接辞は、化石化された形式で残っているか、文法の周辺的な役割しか果たさないとされている。また従来は台湾で話されている言語には存在しないと考えられてきた。ところが論者の研究によってオーストロネシア語族の原郷である台湾先住民の言語の一つにもそれが多くの語で残されていること、しかもそれが動詞の派生において重要な役割を果たしていることが明らかにされたことの意義はきわめて大きい。過去200年に及ぶオーストロネシア語族の言語に関する研究の中でも、特筆すべき発見に数えられるであろう。

これらに加えて巻末に付録A、Bとして、パラン方言とタロコ方言の非意志性接頭辞の目録、付録Cとして非意志性接頭辞のつく語根のセデック語祖形再建、付録Dとして談話資料、そして本論文に現れるパラン方言の全語彙が付録Eとして添えられている。本論文は、パラン方言に関する信頼が置ける文法記述、台湾諸語もその一員となっているオーストロネシア語族の歴史・比較言語学的研究における衝撃的な発見、そして付録をはじめとする豊富なデータを提供している点で台湾先住民の言語研究に大きな貢献をしていることは明らかである。

ただ本論文に望むべき点が残されていることも確かである。たとえば自動詞の活用は、用例が採集できなかったこともありまだ十分に調査されていない。後半は比較言語学的な研究とあるが、セデック語以外の台湾先住民言語との比較はまだ行われていない。何よりも、論者がすでに収集している三千語あまりの語彙を辞書として提出できなかったのは残念である。ただしこれらは、論者が最も良く認識している点であり今後の調査と研究の過程で必ず補われて行くであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2016年2月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。